

超高齢社会への準備

代表者 片山 恵 (法学部 法学科 3年)

1. 目的と概要

現在日本は超高齢社会を迎え、今後養護老人ホームの需要はさらに高まると考えられます。そのような現状において当プロジェクトでは学生という社会に出る前段階で、養護老人ホームでのボランティア活動を通じて、社会福祉の理解を深めると共に、高齢社会や老齢学について見識を深めることを目的としています。

2. 実施スケジュール

平成19年	5月	養護老人ホームさぬきにてボランティア活動
	6月	〃
	7月	〃
	10月	〃
	11月	〃
	12月	〃
平成20年	1月	さぬきにてレクリエーション (ビンゴ&なぞなぞ大会)

3. 成果の内容及びその分析・評価等

活動の主な内容は、毎週水曜日の午後2、3時間程度、高松市宮脇町にある社会福祉法人さぬきの老人ホームを訪問し、入所者の方々と会話をしたり、売店の手伝いをしたりすることでした。また、施設でレクリエーションなどが企画されているときにはその手伝いもさせていただきました。10月頃からは従来の話し相手や売店の手伝いだけでなく、施設職員の方の指導の下、入浴介助や喫茶の手伝いなども行いましたが、これらの作業は実際に高齢者の方の体に触れることになるため、細心の注意を払い安全を第一に行動しました。12月にはインフルエンザやノロウイルスなどの感染症対策のため施設内の消毒のためのモップかけにも参加しました。平成20年に入ってからプロジェクトメンバーが全員3年生であるため、就職活動などでボランティア活動は困難となり、1月に行ったレクリエーション活動を最後にこのプロジェクトを終了することとなりました。レクリエーション活動ではなぞなぞとビンゴの大会を開催し、多数の入所者の方々に参加いただき成功に終わりました。レクリエーション開始の直前までは会場への集まり方が疎らで予定よりも参加人数がかなり少なくなるかと

思われましたが、自分達から積極的に勧誘に赴き、職員の方々にも協力していただいた結果多数の入所者の方々にご参加いただきました。そして終了時には多くの入所者の方から、「ありがとう」「これからも頑張る」など声をかけていただきました。なお、このレクリエーションでは当初ソフトバレーボールを使い、体を動かす遊びも行う計画でしたが、会場や参加者の方々の負担になりかねず断念する事になりました。

4. この事業が本学や地域社会等に与えた影響

地域社会へ与えた影響については、特定の養護老人ホーム訪問が活動内容であるため、特になかったと思います。とはいえ、養護老人ホームでのボランティアは団体での申し込みが基本であり、個人的に興味を持って申し込む機会がないのが現状です。そのような中、当プロジェクトは小規模ではあるものの高齢者ボランティアの入り口となることが出来たと思います。また、大学と養護老人ホームという地域との関わりが少なく思われる施設の橋渡しが出来たとも感じています。規模が小さいという点や学内での認知度の低さについてはやはり課題がまだ残っており、今後改善すべき問題であると思われま

5. 自分たちの学生生活に与えた影響や効果等

今回の活動では日頃接する機会の少ない高齢者の方々とのふれあいを通じ、高齢者への接し方について職員の方々にご指導いただきながら学ぶことが出来ました。さらに、特に高齢者の方と話をすることに限らず、それ以前に、人と接するにあたり自分の会話力などの未熟さを痛感しました。話をしている内容がいつもその日の天気の話や出来事についてばかりで、会話が止まったときに沈黙が続く高齢者の方々に気まずい思いをさせたことなど反省すべき点が多々ありました。今後就職などで社会に出て行き様々な年代の人々と関わるようになっていく時期にありながら、これまで同年代の友人達との関係にいかにかかっていたかを認識する事となりました。他にも、私たちは、非常に失礼な話ではあるのですが、高齢者の方というと難しい事はあまり考えられないだろうと思込んでいました。実際にレクリエーションを行うにあたり、話し合いをする中で、なぞなぞの問題を選ぶ際なるべく簡単なものを選ぶようにしていました。しかし、レクリエーションではお年寄りの方々には、すぐに答えを出し時間が余りそうになったため、予備として用意していた問題をいくつも使用することとなりました。そればかりか、なぞなぞの答えも一つだけではなく正解となる様々な答えを、豊かな発想力をもって出してくださったのです。他にもボランティアによって得られた様々な経験から私たちは、自分達の未熟さと高齢者の方々の知識や経験の積み重ねの素晴らしさを実感すると共に、誰かのために何かを行い、それが喜んでもらえるという非常に充実した体験をする事ができました。これらの経験により社会福祉の理解を深め、超高齢社会における自分達のあり方を学ぶという当プロジェクトの目的も達成することができたと思っています。

6. 反省点・今後の抱負（計画）・感想等

今年度は昨年6月の百日咳の発生に伴う学外活動の禁止の影響により当初の予定よりもボランティアの実施回数は少ないものとなりました。しかしながら、入所者の方々の健康を第一に考えるとそ

れも仕方のない事だったと思われま

プロジェクトに関する反省点については大きく二つ挙げられます。まず一つ目は今回のプロジェクトが配分された予算の半分も使うことなく終了した事です。当初の予算申請時における計画の不十分さと、知識の不足が原因であったと反省しております。ボランティアが活動の基本である以上、予算に頼らずプロジェクトメンバーで意見を出し合い、より工夫を凝らすべきであったと思いました。さらに、限られた予算を配分していただいたにもかかわらず、計画の不十分さから半分以上の予算を余らせたことで、他のプロジェクトの方々にもご迷惑をおかけした事をお詫びします。

二つ目の反省点は、4の、この事業が本学や地域社会に与えた影響においても若干触れました、当プロジェクトの学内認知度の低さです。本プロジェクトも今年度で3年目になり、学部内での認知度は高まってきましたが、いまだ学内全体では広く認識されているとは言えず、参加者も限られています。それについては来年度以降、より広く参加者を募るため、ポスターの製作や積極的な勧誘など何らかの措置を講じるべきと考えます。

なお、レクリエーション時の写真などについては、さぬきに問い合わせたところ施設入所者の方々のプライバシー保護の観点から掲載は許可できないとの回答をいただきましたのでここでは控えさせていただきます。

最後になりましたが、このたびは当プロジェクトへのご支援、本当にありがとうございました。

7. 実施メンバー

代表者	片山 恵	(法学部 3年)		
構成員	柏 貴章	(法学部 3年)	武田 裕也	(法学部 3年)
	金田 佳子	(法学部 3年)	野津田 泰嗣	(法学部 3年)
	黒田 貴大	(法学部 3年)	三宅 貴浩	(法学部 3年)
	小林 沙織	(法学部 3年)		

